**『啐啄』　　　　　3月号**

**“ いざ、旅立ちの時 ”3年生　296名のみなさん　ご卒業　おめでとうございます。**

**瀬田中学校　校長　今井　弘樹**

☆彡　　3年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。私は皆さんが3年生に進級されてからの日々をこの瀬田中学校で一緒に過ごさせてもらいました。わずか1年間ですが、大変感慨深く思い出となる大切な時間となりました。ありがとうございました。3月13日の卒業式で皆さんは瀬田中学校を旅立って行かれます。卒業は旅立ちであり、そして同時に瀬田中学校は母校となり心の故郷になります。一人ずつ卒業証書の氏名を書きながら、いろいろな場面が思い浮かび、この1年間の出来事が私のこころを通り過ぎていきました。

☆彡　　特に印象深く思い浮かぶ一つが、修学旅行の学問の神様と言われる菅原道真公を祀った『太宰府天満宮』です。3年生の皆さんの中で記憶されている人もいるかもしれませんが、太宰府天満宮の樹齢千年を超える白梅の「飛梅伝説」です。

東風吹かば　匂ひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春な忘れそ

　　　　「東風（こち。春風のこと）が吹いたら、香りをその風に託して大宰府まで送り届けておくれ、梅の花よ。主である私がいないからと言って、春を忘れてはならないよ」という菅原道真の和歌を思い出しました。道真は、突然、思いに反して京都を離れることになります。その際、梅をこよなく愛していた道真は、屋敷にあった梅の木に別れを告げる歌を詠みました。菅原道真の梅に対する愛情と、梅の木を置いて行かなければならない悲しさや寂しさが込められています。その想いは梅の木にも伝わっていたようで、主とともにありたいと願った梅の木は、一晩にして、都から菅原道真公が住む大宰府の屋敷の庭へ飛んできたと言います。

☆彡　　「卒業」という言葉には、名残惜しいさみしい思いがついてきます。厳しい寒さの中にあっても白い可憐な花を咲かせるその凛とした飛梅のように、卒業生の皆さんが瀬田中学校に戻ってくることはできませんが、懐かしくなった時、困ったことがあり相談したくなった時、瀬田中学校は心の故郷です。いつでも戻ってきて、先生方と言葉を交わしてほしいと思います。

☆彡　　3年生の国語科の教科書(光村図書)にある魯迅作の『故郷』という小説の最後の一文は、

・・・・思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

と結ばれます。私たち瀬田中学校の教職員の願いは、卒業生の皆さんがそれぞれの進路で元気で頑張って活躍し成長してくれることです。何事も、「０」を「１」にすることからしか始まらず、そしてその一歩は何より大きく、そこから「１」を「２」に、「２」を「３」にと毎日少しずつでも続けていくことです。卒業生の皆さん、「希望」をもち未来を切り拓いて自分の「道」をつくって行ってください。

☆彡　　在校生、教職員は瀬田中学校のこれまで多くの卒業生や地域の諸先輩方が築き上げてきた歴史とその教育の成果を未来の瀬田中に引継ぎ、繋いでいきます。

その中で特に一つを挙げるとするなら、それは瀬田中学校でずっと取り組んできている ” 大切にしたい３Ｓ運動”です。　「スッキリ環境、授業もイキイキ～スッキリ学習環境を整え、スタートよく授業に臨む～」、「爽やかあいさつ。いつもニコニコ 爽やかな心のこもった挨拶 ＋ ワンを心掛ける」、「すすんで活動、みんなキラキラ　すすんで活動の場を求め、自分のよさ**を**発揮し、高める」を　”未来の瀬田中に引継ぎ、繋いでいく活動” として大切に取り組んでいきたいと思っています。

　　最後になりましたが、保護者の皆様、地域の皆様に、今日まで本校教育活動に対するご支援とご協力を賜りましたことに心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。